

新ケッヒエル目録『ケッヒエル2024』の完成を祝って —— 年代順配列はやはり必要とされるのでは? ——

野口秀夫

1. はじめに

犬輔: 2024.9.19 に出版社ブライトコップ・ウント・ヘルテルと国際モーツアルテウム財団から新ケッヒエル目録『ケッヒエル2024』の完成・出版が発表されました^{注1}。

鳥代: 2024.9.24 には財団のウルリヒ・ライジンガー博士が来日して、
—— モーツアルトの住家の修復を支援して以来縁のある ——
第一生命の大会議室で、記念演奏会を開催するとともに『ケッヒエル2024』を第一生命会長に手渡しました(右図)^{注2}。続けて、ザルツブルクにおける新版発表の続きと位置づけられる記者会見が行われました^{注3}。



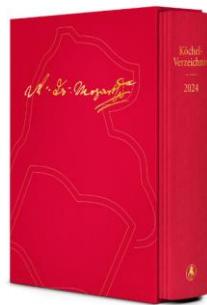
教授: ケッヒエル目録の歴史を振り返っておこう。法律学者であり植物学・鉱物学の大家、ルートヴィヒ・リッター・フォン・ケッヒエル Ludwig Alois Ferdinand Ritter von Köchel (1800-77) は1862年に約10年間の研究・調査の成果として『失われた作品、未完の作品、編曲された作品、疑わしい作品、書いたことにされた作品の報告をともなうヴォルフガング・アマデー・モーツアルトの全作品年代順主題目録』をライプツィヒのブライトコップ&ヘルテルから出版した^{注4}。本文626曲の他に付録として、かつて存在したが失われた作品が11曲、未完の作品が98曲、モーツアルトの作品に基づく編曲が75曲、真作かどうか疑わしい作品が47曲、モーツアルトに帰せられた偽の作品が63曲含まれていた(今でもこの初版のケッヒエル番号が参照される理由は単にケッヒエルへの敬意からだけではない。度重なる改訂により作品の同定が難しくなってしまっている上に、改訂そのものが実態に追いついていない状況のため初版が普遍の拠り所となっているのである)。

1905年のヴァルダーザーによる第2版は小さな改訂が加えられたのみであったが^{注5}、1937年の第3版はアルフレート・AINシュタインにより、多くの改訂、順序の変更、真贋の逆転、新発見の追加がなされた。AINシュタインは未完成、失われた作品も年代順の本文に移したが、あるものは付録の中に入れた。ケッヒエルの番号が既に多くの文献に使われてしまっていたので、新しい年代については別番号としてアルファベットを小文字で付けた(ケッヒエル=AINシュタイン番号と呼ばれた)。1947年にAINシュタインはアメリカで第3版の補遺を追加している^{注6}。「ケッヒエルが十分に音楽家でなかった」ために様式分析による年代設定に弱点があるとしたAINシュタインではあったが、結局は自身の音楽的直感に頼るしかなく、逆にケッヒエルの取った文献学的資料批判の態度を軽視したため、事実と憶測がないままになり、恐るべき誤りが混入てしまっている。

東西ドイツに分かれたブライトコップ&ウント・ヘルテルが東ドイツで第4版と第5版を出したが、これは1937年のリプリントであり、補遺は反映されていない。

1964年、新モーツアルト全集を中心とする新しい研究ムードの中でギークリング、ヴァインマン、ジーバースにより第6版が出版された^{注7}。付録が全面的に改められた他は、AINシュタインと同様の新番号付けが採用されている。以来我々は2重、3重番号を使う不便さを余儀なくしてきた。しかし前述の通り、この第6版も現役で使うにはもはや役に立たなくなっている。ヴォルフガング・プラートが学問的資料研究の警鐘を鳴らしたまさにその年に出版された故に、資料批判が不十分であり、変更を要する項目が数え切れないほど出できている。第7版、第8版は第6版とまったく同じ版である。

そこで1993年に筆跡研究・用紙研究の成果が定着し、新モーツアルト全集主要部が完成したことを背景に『新ケッヒエル Der neue Köchel』(敢えて第9版と呼ばないと宣言された)の計画が編集者ニール・ザスローの下、10名の共編者、編集顧問、特別顧問の名を連ねて立ち上がった^{注8}。ザスローは当初自らのマッキントッシュにすでにほとんどのデータが集積されているとして、2000年の発行を目指して楽観的に考えていたが、生誕250年の2006年をまたいで資料がますます増えていったため、延期に延期を重ねざるを得なくなった。ついには音沙汰もなくなり、出版を諦めたのではないかとさえ囁かれました。そして今日、1964年から60年経ち、ようやく『ケッヒエル2024』^{注9}の完成・出版となったのである(右図)。



2. 『ケッヒエル2024』の概要

2.1 国際的なモーツアルト研究の最新の成果に基づいている

犬輔: このB&H社の謳い文句がどういうことを意味しているのか見ておきましょう。先ず編集者がニール・ザスロー、校訂者がウルリヒ・ライジンガーとなっており、10名の共編者、編集顧問、特別顧問の名前がありませんよ。

鳥代：モーツアルテウム大ホールにおける出版セレモニーで MC のバルバラ・レットはこう説明しているわ^{注10}。「私たちの物語は、昔々という言葉で始まります。かつては、ラップトップもスマートフォンも AI もありませんでした。遠く離れたニューヨーク州のイサカで、勇敢な男 [ニール・ザスロー (右下図。プレゼン映像から)] がモーツアルト研究の金の羊毛を求めて出発しました。世界中から多くの賢者が彼に加わりましたが、彼らは道が長く、目標が遠いことに気づき、別の道を選びました。湖と山に囲まれたとても小さな町、海の向こうの小さな都市で、忠実な同志はお互いを見出だし、20年以上障害を乗り越え、一緒に困難と闘いました。そして今日、2024.9.19、その時がやってきました。新しいケッヒエルがここにあります。これまで以上に優れ、美しく、使いやすくなりました」。



犬輔：プレゼンの動画がアップされているのは知っていたけど、鳥代さんは聞き取れたんですね。

鳥代：ドイツ語の音声データから文字起こしするソフトがあつて^{注11}、びっくりするほど精度がいいの。聞こえにくい単語は補完するし、冠詞の間違いを訂正してくれるほどなのよ。おそらく AI (ドイツ語では KI) による最先端の技術が使われているのね。英語で応答しているザスローの発言はのちほど掲載しましょう (付録として8ページに載せました)。

教授：本題に戻って、「賢者が去った」とは言え、フラグメントやスケッチにおいてはウルリヒ・コンラートの成果^{注12}を取り入れており、年代設定においてはクリフ・アイゼンの説^{注13}が考慮されているであろう。また、解説においては言説の根拠が世界中のおびただしい論文からの記名入り引用で裏付けられている。これはまさに「国際的なモーツアルト研究の最新の成果に基づいている」と言える特徴である。ただ、ひとつ言えることは、それにもかかわらず、情報の選択に関しては 100%ザスローの意向が色濃いということである。

2.2 新たに実践された本文の編集方針

(1) ケッヒエル初版の番号付けに回帰

犬輔：本文を見ると K.1 から始まっているけど、終わりが K.721 なんです。ケッヒエル番号が K.626 までなのは常識ですよ。なんか違和感があります^{注14}。

教授：ザスローは日本における特別講演 (1994)^{注15} でこう述べていた。「可能な限り本文の番号はケッヒエル初版の番号に立ち戻るが若干の新しい番号も含まれる」。すなわち K.627 から K.721 の 95 曲が新しい番号で、これらは B&H 社によれば「これまでの版では欠けていた、あるいはほとんど言及のなかったフラグメントや、消失した作品」である。

鳥代：初版に番号がなかった例えば K.1a などはその後の最初の版の番号なのね。一方初版で番号があった K.1 に第 6 版で分割された K.1e と K.1f を使うことはもはやありません。

犬輔：疑問があります。第 6 版では年代順ということから K.1e と K.1f は K.1a の後に配列されていました。それが K²⁰²⁴ では K.1 が先、K.1a が後と順序が逆になっています。

教授：ここで大事なことを言っておかなくてはならない。K²⁰²⁴ は『ヴォルフガング・アマデー・モーツアルト音楽作品主題目録』であって、「年代順」という言葉は使われていないのだ。

鳥代：純粋に番号順ということなのよ。初版では番号順イコール年代順を目指したのですが、もはやその方針では無理だということになったのです。

犬輔：年代順にはならないけど、多くの人が慣れ親しみ、曲と不可分になった番号を残しておくというのがザスローの考え方なんですね。

(2) 作品の年代順配列について

教授：ザスローはかつて年代順配列を前提に次のように語っていた^{注16}。「ケッヒエル初版の番号を尊重し、二重番号制を排除する。更にその番号が年代順にそぐわなくなっている場合は（ほとんどの番号がこれに該当）ケッヒエルの K にアステリスクを付ける。例えばフルート四重奏曲 イ長調は K*298 と呼ぶ。もちろん、ケッヒエル番号の全くない曲には新しい番号がつく。そして、各曲を年代順に並べる。年代が決定できない作品をどこにおくかは問題で、新しい方法を開発する」。

鳥代：それが方針変更によって本文は番号順になったのね。「年代が決定できない作品」の配列はこれで問題がなくなった代わりに、年代のはっきりした作品の順番をどうするかが問題となつたのです。そこで解決策として、「年代順作品概要」というページを別につくり、ここでケッヒエル番号だけが年代順に配列されています。年代が断定できない場合、例えば「um 1773 = 1771 と 1775 の間」と説明され、前後に夫々 2 年の許容を与えています。

(3) フラグメント

鳥代：わたしはフラグメントという言葉が付されている作品に関して疑問を感じます。フラグメントには断片（私見：大部分が未着手/紛失している作品）、草稿（私見：全声部が設定されており、作品全体の見通しが読みとれる以上に書き込まれた稿）、未完（私見：冒頭から残っているが、終止和音が書かれていない作品。また、終楽章、終幕が書かれていない作品）が含まれているようですが。これらが分類されていません。

教授：そもそもザスロー（1994）はこう述べていた。「本文には完成作品のみ載せ、シュタドラーの補作したクラヴィア作品ばかりでなくハ短調ミサやレクイエムも本文には入れない。もちろんフラグメントやスケッチも排除される」。この方針に当時講演会の会場のあちこちから驚きの声が挙がったのを覚えている。ザスローは笑いながら「付録の方にはきちんと入れて、K.427やK.626の番号とリファレンスを取るから心配しないでよい」と答えていた。それが、今回のK²⁰²⁴では「未完成作品もフラグメントも本文に入れる」と大変更されたのだ。ザスローは巻頭の凡例（「レイアウト、内容、使用に関する注意事項」）で、「完成作品はすべてフラグメントが後に完成されたもの」なのだから、従来版どおりフラグメントを本文に入れることにしたと説明している。

犬輔：あっ、アイネ・クライネ・ナハトムジーク K.525 がフラグメントとして載っているのを見つけました。どういうことなんですか。鳥代さんの分類にも該当しませんが…。

教授：完成作品からメヌエット楽章が一つ紛失しているということだ。

鳥代：クラヴィア協奏曲 二長調 K.537（フラグメント）のフラグメントの意味は？

教授：完成作品だが手抜きのため左手の音符が一部未記入なのだ。

犬輔/鳥代：なるほど、分類してもきりがないのですね。一括して「フラグメントとは一部分が未着手/紛失により完全とは言えない形態の作品」と捉えておきましょう。

(4) スケッチ

犬輔：さっき教授がザスロー（1994）の報告でスケッチと言っていたジャンルに関して頭が混乱しています。表に示すように K²⁰²⁴ とコンラート^{注17}との間に表題の齟齬があるんです。

表 1 メロディ・スケッチの表記

K ²⁰²⁴	コンラート
Melodieaufzeichnung K.701	Melodieskizze (Sk1785d)
Melodieaufzeichnung K.705	Melodieaufzeichnung (Sk1787a)
Melodieaufzeichnung K.Anh.H16,06	Melodienotiz (Sk1783e)

鳥代：K²⁰²⁴ は表題を Aufzeichnung に一本化したのではないかしら。意味は「記録」のことだけれど、ここでは「スケッチ」と訳してもいいのでは？

教授：K²⁰²⁴ にも Skizze という用語は使われており、「モーツアルトがある作品の準備段階で書いた個人的な記譜のメモ」としているが、表題には K.Anh.H17 に Ausschnittsskizze（詳細なスケッチ）がまとめられている以外は、“Skizze”（いわゆるスケッチ）として使われているだけだから、むしろ Aufzeichnung という表題は「詳細でないスケッチ」と解釈できるのではないか。我々が普通イメージする「スケッチ」という言葉と一致すると考えられる。

犬輔：そのスケッチはどうやら本文と付録に振り分けられて記載されているようですが、どういった基準で振り分けられているのかは、またの機会に明らかにしましょう。

(5) 草稿

教授：曲の表題あるいは付記には使われていない用語だが、ザスローは草稿 Entwurf を次のように定義している。「他の作品やその作品の他のヴァージョンがそれに取って代わったため、完成を取りやめた」ということが作品の伝承から明らかである断片的な作品」。鳥代さんの私見と比べるとかなり限定的な定義だと思われる。余談だが、ザスローが定義している Skizze や Entwurf という用語が、本文の表題に使われていないという矛盾はライジングガードの校訂がザスローにフィードバックされなかつた結果によるものかもしれない。

(6) 疑作

鳥代：「真偽が疑わしい作品 Werke zweifelhafter Echtheit」という付記について、ザスローは「おそらく真正であるが、その真正性を資料では証明できない作品」と説明しています。同時に「作品がたぶんモーツアルトによって書かれたのかも知れないという程度で、真正性の疑いが優勢であるならば直ちに、それは K.Anh.C に割り当てられる」と述べています。

教授：ザスロー（1994）は次のように断言していた。「ある作品を本文に入れるか、疑わしい作品の付録に入るかは懷疑主義をとる。すなわち迷う作品は本文には入れない」。この姿勢に反して、今回の方針はかなり甘い判断に傾いているのではなかろうか。

犬輔：本文に入れたけど「少しでも真正性に疑いが残る作品」は正直に「疑作」と断わり、「真正性の疑いが優勢な作品」はためらわずに「偽作」の付録に入るということなんですね。

(7) 日付と場所

教授：鳥代さんが今紹介した K²⁰²⁴ の疑作と偽作の定義の中で「おそらく vermutlich」、「たぶん möglicherweise」という言葉が使い分けられているが、「日付と場所 Datierung」でもこれらの言葉が使われている。ケッヒエル第6版までは wahrscheinlich, vermutlich, vielleicht, angeblich を使っていったが、分かりにくいとの声が頻りであった。それを受け「おそらく vermutlich」「たぶん möglicherweise」「伝 angeblich」に絞ったようである。

鳥代：わたしはもっと進めて記号で表すことを提案するわ。感覚的な塩梅なのだからエクスクラメーションマークとクエスチョンマークを使って「おそらく 1775 年」は「!75」、「たぶん 1775 年」は「?75」とするのよ。「伝 75」と合わせて翻訳するときの参考にしてください。

犬輔：瓢箪から駒の表現法ですね。簡潔で分かりやすいです。

(8) 書簡の参照

教授：今回新たに、その作品に言及している書簡の BD 番号が参考されている。ライジンガーによればコーネル大学の院生が手分けして作業したそうだ。

犬輔：でも、日本のぼくたちにとってはやっかいですよ。『邦訳書簡全集』には原書に基づく BD 番号が載っていないので、『デジタル版書簡全集』のサイトで検索を掛けて手紙の日付を辿るという遠回りを余儀なくされます（蛇足ですが『デジタル版書簡全集』には原書になかった手紙が追加されており、さすがにそれらには BD 番号がありません）。

教授：言い訳になるが『邦訳書簡全集』の編集方針が「純粹に学術版のかたちをとる原語版とはまったく体裁を異にし、独自な全集版編集を試みたもの」であったから BD 番号がないのは致し方ない。多くのレーオボルト、ナンネル、コンスタンツェの手紙が邦訳されていないことも日本人の我々にとってはハンディだが、諸君たちはもう慣れっこになっているね。

(9) 歌詞の出典リブレットの参照

教授：歌詞テキストの出典も新たに追加された。そこにはサルトーリ番号が付されている。諸君たちも corago で検索したリブレットのタイトルにサルトーリ番号を付していたからよく知っているね。この番号はリブレットの版、すなわち上演場所・年度を特定できるから、論文をトレースする場合には必須のものとなる。

鳥代：あら、三重唱曲「いとしい光、うるわしい光よ」K.Anh.A.47,Nr.5 [K.346; K.439a] のテキストは從来出典不明とされていたのに、「アンジェロ・レンジ台本、フランチェスコ・サヴェリーオ・ガルツィア作曲の三声の音楽笑劇《後見されている娘 La pupilla》（ローマ 1755；サルトーリ 19932）第1部」とあり、解説の項に「フローロのアリア」としっかり書いてあるわね。挙げられている参考文献をざっと読んだけれど、その中にはこの出典に言及したものはなさそうだから、大学院生たちが Web を検索して探し出したのかしら。

犬輔：きっとぼくたちと同じ作業をしたんだよ^{注18}。

2.3 付録 A：他者の作品の筆写/編曲

教授：付録 A は第6版と同じ編集方針をとっている。そして、わざわざそこに含まないものとして、「変奏曲の主題（「ああ、お母さん、あなたに申しましょう」など）」、「楽曲中に民謡（シュトラスブルガーなど）を引用したもの」、そして「他者の作品の一部（《コサ・ラーラ》や《2人が争えば3人目が得をする》など）を引用したもの」を挙げている。

犬輔：モーツアルトの手稿譜があれば確実ですが、手稿譜がない場合は問題含みです。もし手稿譜がなく付録 A に登録された後に、モーツアルトとは無関係だったと分かると、次の改訂では付録 C に編入されるんですね。そのような理由で第6版では旧付録 A だったけど、今回付録 C に移された作品も多くあります。ただ、作品によっては付録 C に移されず番号が消えてしまうという扱いもあるかも知れないと邪推もします。

鳥代：逆に、付録 C に登録されていた曲が、後に原作者が判明し、かつおそらくモーツアルトの筆写であろうとなった場合には次の改訂で付録 A に変更するかどうか決められるでしょう。そのような候補としてザスローは「K.Anh.C10.02（キルヒャー）、K.Anh.C10.23（不明、バードによるとされる）、K.Anh.C27.18（不明）がモーツアルトによる資料がかつて存在していたであろうことを肯定も否定もできない」と述べているわ。

犬輔：第6版の旧付録 A では番号が飛び飛びで K.Anh.A88 まででしたが、今回は間を埋めていて、最終は K.Anh.A101 となっており、全 47 ページにわたっています。

鳥代：ヘンデル作品の編曲や、ゴットフリー・ジャカンとの協業、ミスリヴェチェク追悼（？）のカンツォネット「静けさはほほえみつつ」などはこの付録 A に登録されています。

2.4 旧付録 B：モーツアルト作品の他者によるコピー/編曲

教授：旧付録 B は K²⁰²⁴ ではカットされている。

犬輔：旧付録Bはモーツアルトの受容の一端を知らしめるデータでしたが、年代の下限を決めないとコピーも編曲も日に日に増えていき、收拾がつかなくなります。しかもほとんどは編曲しても論文も書かれず、CDなどの記録メディアも配信に変わっていき、文書でのトレースができない時代となっています。廃止はもっともなことと納得します。

鳥代：わたしは弦楽五重奏曲 変ロ長調K.46が他者によるK.361の編曲であるので、今までこの作品をK.Anh.B zu 361と呼んでいました。でも今回調べたところこの記述は誤りだったようで、K.46は第2版まで存在したあと、第3版以降無番号となっていたのです。

犬輔：やっぱり番号が消えてしまう例があったんですね。ではその弦楽五重奏曲 変ロ長調はK²⁰²⁴ではどうやって探せばいいんですか。

教授：コンコーダンスのページがあるから、そこを見るとK.46▶K.361と書かれている。K.361を見ると解説の中でK.46は他人による編曲である旨説明されている。新しい番号がAnh.Cにあるというわけではない。

2.5 付録C：誤った帰属

教授：第6版の旧付録Cでは「疑わしい/誤った帰属の作品」であったが、K²⁰²⁴では「疑わしい作品は十分な議論の末本文に入れたので付録Cを誤った帰属の作品のみにした」としている。さらに、「スペースの都合で記述を簡素化せざるを得なかつたので、詳細はオンラインケッヒエルにアクセスしてほしい」とのことである。書籍にこう書かれているのも時代の流れであろう。

鳥代：TVでも最近は放送時間枠からはみ出たコンテンツをホームページで見るよう促します。無料サービスとはいえ、二度手間を促すのは有難迷惑でもあります。

2.6 旧付録D～旧付録F

教授：第6版の旧付録D（作品全集）、旧付録E（モーツアルトの出版者と出版作品）、旧付録F（ヴィーン国立図書館のフォトアーカイヴ）は、K²⁰²⁴ですべてカットされている。ただし旧付録Eの代わりに「歴史的エディション」の章を立ち上げている。

2.7 付録G：カデンツァ、AINGANGそして装飾

教授：K²⁰²⁴では付録Gが新設された。モーツアルトの作品用だけでなく、他者の作品用にモーツアルトが付けたアリア、協奏曲などに関するカデンツァ、AINGANGそして装飾が含まれている。

犬輔：第6版でもK.626aにクラヴィーア協奏曲に限って（他者の作品用も含めて）カデンツァとAINGANGが纏められていましたが、協奏曲の本体とカデンツァ、AINGANGで番号が別々という扱いに戸惑いました。でも、実際にはカデンツァの入れ替えが自由にでき、それを番号で表現できるということですから、有効に使いたいものです。

2.8 付録H：練習帳・教材・スケッチ

教授：これもK²⁰²⁴で新設された。98頁を占めており、表2のカテゴリーに分けられている。

表2 付録H：練習帳・教材・スケッチのカテゴリー

番号	カテゴリー
K.Anh.H1	練習帳
K.Anh.H2	スケール
K.Anh.H3	インターバル表
K.Anh.H4	和音と和音進行
K.Anh.H5	転調練習
K.Anh.H6	通奏低音の記譜
K.Anh.H7	カントゥス・フィルムスによる対位法学習
K.Anh.H8	カントゥス・フィルムスを使用しない対位法学習
K.Anh.H9	他者のテンプレートとモデルに基づいたカノン
K.Anh.H10	学習カノン
K.Anh.H11	インターバルカノン
K.Anh.H12	フーガ
K.Anh.H13	対位法のテーマ
K.Anh.H14	その他の対位法スケッチ
K.Anh.H15	自由な楽章での練習
K.Anh.H16	テーマとモチーフのスケッチ
K.Anh.H17	未確認作品への詳細なスケッチ
K.Anh.H18	楽器レッスン用スケール
K.Anh.H19	指の練習
K.Anh.H20	ソルフェージュと声楽の学習
K.Anh.H21	インチピット
K.Anh.H22	自筆譜の断片
K.Anh.H23	試し書き
K.Anh.H24	雑

鳥代：K.Anh.H1 のカテゴリーに入った《バルバラ・プロイヤーのための練習帳》、《トマス・アトウッドのための練習帳》、《フランツ・ヤーコプ・フライシュテッターのための練習帳》などは従来ケッヒエル番号がなかったのね。

犬輔：この付録 H の特徴を一言で言えば「プライベートな曲」だということですね。それゆえ元来の作曲家モーツアルトの作品というイメージからは遠いかもしれません、そうだからこそ新しいモーツアルト的一面を見ることができるかもしれません。すでに申したとおり、スケッチがここに入るには納得できますが、本文にもスケッチが残っている理由については分からぬままです。

教授：ザスロー（1994）のコメントは「スケッチ/断片には別の年代順の番号が付く。個々に本文と関連づけがなされる」であったが、本文のスケッチも付録 H のスケッチも「年代順の番号」にはならなかつた。

3. 全作品の年代順配列への我々からの提案

鳥代：「年代順作品概要」のページに配列されたのは本文のケッヒエル番号だけです。付録 A、付録 G、付録 H の作品は含まれていません。

犬輔：従来のケッヒエル目録のように、断片・スケッチを含め同一配列に収めた全作品の年代順配列があれば、モーツアルトの作曲過程を直感的に理解しやすくなります。ブラウザの検索機能を用いれば、求める曲を新旧ケッヒエル番号や、曲名で検索することもできます。

教授：それは本研究会が第6版を基に、コンラートの Sk 番号、Fr 番号を加味した『モーツアルト全作品・草稿・スケッチ年代順目録』^{注19}を Web に公開したものの方針そのものだね。ザスロー（1994）は「最後に書いた稿は徹底的に疑問視する。いくつもの段階の稿がある場合はすべてを列記する」とも述べており、実際 K²⁰²⁴には複数稿が明記されている。稿の違いについても研究会版ではすでに一部ではあるが年代順配列を試みている（K.297など）。諸君たちは研究会版を K²⁰²⁴の内容に基づいて改訂する必要があるね。

鳥代：すでに英語の Wikipedia には第6版の K.626 の後ろに K.626~K.721 を追加し、その他の作品の番号を K²⁰²⁴にしたがって付け直したもののがアップされていますが、これは第6版の年代順のままであって、K²⁰²⁴の日付に基づいて年代順に並べ直したものではありません。利用に際しては注意が必要です^{注20}。

4. 日本からの貢献、研究会からの貢献、談話室での議論との一致・不一致

犬輔：第6版は20世紀後半のギークリング、ヴァインマン、ジーバースが編集しましたが、そうであっても遠い昔のケッヒエルが付けた番号というイメージが濃厚で、古色蒼然たる学術書として近寄りがたかったんですが、今回ザスロー編集の K²⁰²⁴を手に取って身近さと親しみを感じました。特に巻頭言と凡例に英語が併記されていることは使いやすさの助けになっています。体裁としては 1,392 ページ、17×27cm で朱色の表紙、B&H 社のクマのマークがひっそり浮彫されている朱色の外箱付きです（日本の印刷顔料と違って海外の朱色は退色しにくいので、おそらくモーツアルテーウムからの指定色なのでしょう）。版組は昨今のオンデマンド書籍と同様、なんとなく現代風軽快さを呈しています。

（1）日本からの貢献

鳥代：親しみを感じる理由の一つには、今回初めて日本人の論文が採用されていることも挙げられるわね。故竹内ふみ子（K.505）、西川尚生（K.550）、富田庸（K.Anh.A46）、野口秀夫（K.Anh.H24.Nr.11）ら4人の論文が参考されています。

教授：かつて日本で開催された「1991国際モーツアルト・シンポジウム」^{注21}で、あるパネラーが「日本にどのような論文があるのか、私は日本語が分からないので何とも言えないが」というような発言をしたところ、ヘルムート・リリングから「日本語を勉強して読めばいいではないか」とたしなめの反論があったことを思い出す。ここで当該パネラーから得られる教訓は日本語の論文は理解されないということである。またリリングから得られる教訓は、我々日本人が海外のモーツアルト論文を理解するにはドイツ語、英語、フランス語、イタリア語の他にラテン語、デンマーク語、ハンガリー語、そしてチェコ語などを勉強する必要があるということである。これは難しいことではない。昨今は機械翻訳で十分に意味が通る翻訳をしてくれる。そして海外発表の価値のある論文は、時間がかかるでも英語で書けばよいのである。

犬輔：Web に英語で公開するのでは意味がないのでしょうか。

教授：論文誌に載せなければほぼ引用してもらえない。モーツアルテーウムが論文誌をすべて廃刊して久しいが、2022年にオンライン版論文発表の場 *Miscellanea Mozartiana* を開設した（長さの制限が英語では5000語までだが、十分であろう）^{注22}。他には *Mozart Society of America* の newsletter^{注23} や *Mozart Studien*^{注24}への寄稿も可能と思われる。

(2) 研究会からの貢献

鳥代：当談話室の始まる以前の研究会からの貢献にはどのようなものがあったのでしょうか。

教授：交響曲ニ長調〔第31番〕(《パリ》)K.297の第2楽章の版について、6/8拍子が先で3/4拍子が後といわれていたのを、アラン・タイソン(1978)が逆であるという説を立てたため、ザスロー(1991)は「どちらがオリジナルで、どちらが代替楽章なのかについては、いくらかの混乱が残っており、専門家たちは論争を続いている」としていた^{注25}。一方、研究会では従来説が正しいとしていた矢先、前述の「国際モーツアルト・シンポジウム」で来日していたザスローと議論する機会があり、論文を所望された。日本語論文しかなかつたが、ザスローは「翻訳する人材はいくらでもいるから日本語で問題ない」とのことであった(きわめて例外的な扱い)^{注26}。この結果であろうか(もちろん研究会の貢献だけによるものではないと思うが)、K²⁰²⁴では次のように述べられている。「アンダンテの2つの楽章のうち、どちらが本当にオリジナルで、どちらが後で作曲されたものであるかについては長い論争があった。長さと複雑さに関する情報源とWAMのコメントは、6/8拍子のアンダンテが最初に書かれたことを示唆している。その後大幅に短縮され、最終的には3/4拍子のアンダンテに置き換えられた」。研究会の説が取り入れられ、嬉しいことだ。

犬輔：さらに研究会の英語論文^{注27}によって、従来の《音楽のさいころ遊びMusikalisches Würfelspiel》が真作の《音楽のアルファベットMusikalisches Alphabet》K.Anh.H24,Nr.11[K.516f]と、偽作の《音楽のさいころ遊びたちMusikalische Würfelspiele》K.Anh.C30.01に分割されました。そしてこの論文が《音楽のアルファベット》の初版Erst Druckに当たると書いてあります。

教授：音楽から読み取ったアルファベットFranciscaがおそらくFranziska von Jacquinのことだということにも触れており、人名索引の彼女の項にもクロスリファレンスされている。

(3) 談話室で英語論文を書かなかったことが悔やまれること

鳥代：論文を提出していなかったため、残念なことにアリア「いといしい人よ、もし私の苦しみが」K.646の歌詞の初出をマンツォーリが歌った1755年の上演^{注28}に遡っていません。

犬輔：カンタータ『オフェーリアの健康回復に寄せて』K.477aの競作者コルネットィとして従来のマイナーな説「アレッサンドロ・コルネットの可能性がある」を再び採用してしまっています。ぼくの説「スティーヴンの語源がコロナ(王冠)ゆえ、コルネットィはスティーヴン・ストーレスである」^{注29}を英語論文にしておくべきだったと後悔しています。

教授：バス・アリア「歯が一本、もろくなり、冷たさが沁みる」K.209aに関してはヘンデルの『サムソン』第2幕 第4場のハラファのアリアとの関連性に触れていないね^{注30}。

鳥代：三重唱(ノットゥルノ)「愛らしい2つの瞳が」K.439のテキストはジュゼッペ・ペトロセッリーニ台本《迫害された未知の女性》第1幕 第4場であるのに、第5場という誤情報が採用されています。談話室ではすでに伝言ゲーム化した誤謬を指摘しました^{注31}。

教授：カノン「おれの尻をなめろ」K.231が疑作であるものの、歌詞はモーツアルトのものであるとしているのは談話室の結論と同じであるが、歌詞のg'schwindi(速く)が繰り返しによりschwindig(=schwinden+ig)と聞こえ、Leck mich im Arsch(消えろ)がschwindig(消えた)に繋がるという落ちが浮かび上がるという解釈^{注32}に触れられていないのは残念だね。

(4) 談話室での議論が不足であったこと

犬輔：カノン「おれの尻をなめろ、きれいにきれいにね」K.233はヴォルフガング・プラートによりヴェンツエル・トゥルンカの曲であることが分かつていていたけど、歌詞だけはどう見てもモーツアルトのものであろうと思っていました^{注33}。このモヤモヤは今回この曲がK.Anh.A39という番号になったことで解消しました。つまりモーツアルトがトゥルンカの曲を筆写し、歌詞を付け直したことです。

鳥代：3声のカノン「わたしやマルスとイオニア人になるのはむずかしい」K.559の歌詞について談話室では1629年のチラシに掲載された風刺文を紹介して、モーツアルトのオリジナルではないことを紹介しましたが^{注34}、K²⁰²⁴の解説にも「このテキストはモーツアルトのものではなく、1600年頃まで遡ることができるモデルに基づいている」と類似の見解が述べられており、ライジンガーの論文を参照せよとあります。論点の共通点・相違点を知るべくその論文を見たところ^{注35}、Google booksで1756年以前のdifficile lectu mihi Marsという句を検索した結果difficiles lectu mihi Mars facitと書かれているIlias malorumという1607年のラテン語の手稿にヒットしたとあり、ライジンガーは「モーツアルトはそこにetでIonicuという言葉を加えた」というのです。そして「etを使用して数世紀を越えた2つの無関係な引用の組み合わせが、(現代の立場で)著作権保護を主張できるほどの創作の高みに達する言語作品を生み出したかどうかを尋ねることができる程度の作品である。もしモーツアルトが天才でなかったとすれば、その答えはおそらく学者と一般人の満場一致で否定的になるであろう」と述べています。この最後の見解はわたしたちは異なるわね。でもライジンガーの論文が「口頭での伝承があった」あるいは「法、芸術、軍神が織り込まれている」と述べているところは談話室の議論と一致しています。

5. まとめ

犬輔：初版の番号に回帰することで一般には二重、三重番号を使う煩雑さから解放されるのは事実でしょう。でも、ぼくたちの研究用にはかつて使われた番号はそれなりに意味があるため、残さざるを得ません。例えば、オペラ序曲 二長調 K.670 [K.Anh.109a; K.Anh.626b/34; Skb1776a/2; Skb1776a,b] zu K.256? (!ザルツブルク、76) というような表記となります。特にスケッチ・リーフ番号 Skb は同居する複数スケッチとの相互関係が分かるメリットがあり大事な番号です。なお、Skb 番号が二つあるのはコンラートが付けたサフィックスのアルファベットをザスローが数字に変更したため、併記せざるを得ないからです。

教授：ザスロー（1994）が述べた方針「モーツアルト時代の真正な目録、筆写譜や出版に見られる演奏に関する情報は当時のままに表記する。つまり、19世紀や20世紀の表現や考え方を変えない（Basso を「チェロ及びコントラバス」と訳さない。またパルティア、ナハトムジーク、ノットウルノなどを恣意的にセレナーデに変えない）」はそのまま適用されているが、これも利用する場合やっかいである。例えば、「12管楽器とコントラバスのためのパルティア 変ロ長調 K.361（《グラン・パルティータ》として知られる）」という表記にはかつて呼ばれていた「セレナーデ第10番」の通称は含まれず、況や一時期の誤解が生んだ「13管楽器のためのセレナーデ」という名称も参考されない。日本語の書籍、演奏会、録音メディア、放送などでどのように馴染んでいくかは課題である。

鳥代：今回書籍の発刊と同時にオンライン版^{注36}も公開されました。一部に古い情報が残っています。例えばカンツォネッタ「静けさはほほえみつつ」K.Anh.A36 は書籍では「ヴィーン、!85頃」ですが、オンライン版は1772年のままで。でも、これからオンライン版は楽譜、音源、書簡、そして外部の自筆譜のサイトへのリンクなどを充実させていくでしょうし、さらには新規情報や新発見曲などをすぐに取り入れるでしょう。これらは書籍ではできないことですから、ありがたいことです。ただ、従来の Digital Mozart Edition で見られたような、内容変更の改訂履歴を明示しない^{注37}という悪習は避けて欲しいものです。どこが改訂されたのかは最重要情報なのですから。

付録：2024.9.19 新ケッヒエル出版プレゼンにおけるニール・ザスローの全発言

【49:58から∞】

レット：ニール・ザスロー、あなたは30年前にこのことに取り組み始めたあの勇敢なイサカのお方です。実際、これはどのようにして始まったのですか？これをもう一度やらなければいけないといつ思いましたか？

ザスロー：そうですね、それは何十年も前に始まりました。唯一の説明は、私が「モーツアルトの子供時代」を過ごしたことだと思います。父はモーツアルトが大好きで、たくさんのレコードを残していて、私も音楽家[フルティスト]になり、モーツアルトをたくさん演奏しましたが、それは数十年にわたりました。

レット：では、それは愛だったのでしょうか？

ザスロー：はい、そしてもちろん学者になったとき、他にも考えるべきことを発見し、それがここにあります。

レット：素晴らしい。今どんなお気持ちですか？それは今ここにあり、赤ちゃんが生まれ、すでに大きくなっています。

ザスロー：はい、そうですね、私の二人の娘があちらに座っています。彼らは私にこう言いました。「あなたは知らなかつたと言つていましたが、私たちはあなたに3人目の子がいることを知つていましたよ」。[客席爆笑]

【54:42から∞】

レット：ルートヴィヒ・ケッヒエルは、モーツアルトが子供から天才へとどのように成長したかを示すために、この年代順の主題カタログを作成しました。これが今日に至るまでの私たちのモーツアルト像を形作っています。また、今日に至るまでのすべてのモーツアルト神話を形作っています。この展開に何か新しいものを感じますか？これはあなたにも当てはまり、理解できると言えますか？それとも、私たちは今、新しいモーツアルト像を持っていると言えますか？

ザスロー：モーツアルトの伝記は、幼少期、天才、そして——父親が言ったように——神がザルツブルクに生まれることを許したという驚くべき出来事に焦点を当てており、そのため、多くの考えがあります。次に、若者が自分の本領を發揮するために奮闘し、その後、早すぎる死があります。そして、早すぎる死は、彼の死を受け入れられなかった音楽愛好家の間でセンセーションを巻き起こしました。そしてある意味で、カタログは、彼に死なないでほしいというもう一つの賛辞です。というのは、今日冒頭で聴いた作品[クラヴィーア小品 ト長調 K.635]のように、私たちが見た断片、あるいは完成した断片はすべて、今も出てきて理解されつつあるからです。ですから、この年代記は常にケッヒエルの頭の中にあったのです。それで彼は年代順のカタログを作りました。年代順の問題は、出来事はこのようにには[指をバチンと鳴らす]起こらないということです。物事はある期間にわたって起こります。物事は重なり合います。特定の作品や活動は、本当に正確に日付をつけることができません。ですから、理解されているように番号付けシステムは確かに年代順でしたが、実際には完全でも正確でもありませんでした。そして、カタログのその後の編集者たちは、年代順を修正しようと思ひ試みました。そして、数字は増殖始め、少し制御不能になり、ケッヒエルとアインシュタインが別の考えを持っていて、ザルツブルクで第6版を作成した人々は3番目の考えを持っていましたため、3つの番号が付けられた作品が存在するようになりました。そして、システムは自らの重みで崩壊していました。ですから、誰もそれらの番号をすべて覚えたり、プログラムや楽譜に載せたりしたいとは思わないでしょう。その結果、私たちは元の番号に戻りました。タイトル・ページから「年代記」または「年代順」という言葉を削除しました。そして、それぞれの作品について、その史実、創作、その後の運命など、わかっていることをできるだけお伝えしました。そしてウルリッヒ・ライジンガーが巻末に[実際

には巻末ではなく 105 頁] 素晴らしい年表を付けてくれました。これを見ると、それぞれの作品を調べて、具体的な日付がわかっているのか、大まかな見当がつくのか、まったくわからないのかがわかります [笑]。

[1:01:16 から [∞](#)]

レット：今、名前はどうなっているのでしょうか？オーストリアではザルツブルクを除いて、今でもヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトとよく言います。アマデウスはついに終わったと思います。初期の小さな子はヴォルフガングで、次にヴォルフガング・アマデオと書くか、アマデオ・ヴォルフガングだからです。手紙による後の記入はアマデーです。アマデウスは歴史上的のものです。

ザスロー：そうですね、ニックネーム、正式な名前、洗礼名があり、ドイツ語、フランス語、イタリア語、またはラテン語で付ける可能性もあります。したがって、決定的な形式ではなく、ここにある署名には A.W. モーツアルトと書かれています。おそらくアマデオ・ヴォルフガング・モーツアルトとかそのようなものでしょう。そのため、二つの名前が逆になる場合もあります。実際、これは彼の音楽の悪い比喩ではありません。なぜなら、彼は父親への手紙の中で、私がどんなスタイルでも書けると豪語していたからです。[笑]

ライジンガー：もう一つだけ付け加えてもいいかもしれません。それは、アマデウスがどこから来たのかということです。そして実際、すでに言及した作品を擁する出版社ブライトコフ&ヘルテルが、この『アマデウス』を世に送り出した機関です。もしピーター・シェーファーやミロス・フォアマンがもう少し注意を払ってこの映画を『アマデー』と呼んでいたら、今日私たちはこの程度の議論をすることはなかっただろう。

レット：しかし、もちろん、それは世界的なものであり、ラテン語であり、それが私たちを形作ってきたものであります。

注 1 : 9/26/2024 Presentation of the new Köchel catalogue [∞](#)

注 2 : モーツアルトの未発表楽譜を発見 ドイツの図書館で 9 歳時に作曲か。毎日新聞 2024/9/25 [∞](#)

注 3 : 日本初演！作曲家モーツアルトの「新たな楽曲」。第一生命ホールディングス株式会社 News Release [∞](#)

注 4 : Ludwig Ritter von Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichniss sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amade Mozart's. Nebst Angabe der verloren gegangenen, angefangenen, übertragenen, zweifelhaften und unterschobenen Compositionen desselben. Breitkopf & Härtel. 1. Auflage, Leipzig 1862. [∞](#)

注 5 : 2. Auflage, bearbeitet und ergänzt, Hrsg. von Paul Graf von Waldersee, Leipzig 1905. [∞](#)

注 6 : 3. Auflage, Ann Arbor 1947, Hrsg. von Alfred Einstein. [∞](#)

注 7 : 6. Auflage, Wiesbaden 1964, Hrsg. von Franz Giegling, Alexander Weinmann und Gerd Sievers. [∞](#)

注 8 : Zaslaw, Neal (1997). Der neue Kochel, in: Newsletter of the Mozart Society of America, Volume I, Number 1, 27 January 1997 [∞](#)

注 9 : Ludwig Ritter von Köchel (1800–1877), Köchel-Verzeichnis (K.), Thematic Catalog of the Musical Works of W. A. Mozart, Edited by Neal Zaslaw, Commissioned by the Salzburg Mozarteum Foundation, Presented by Ulrich Leisinger, Breitkopf & Härtel [∞](#)

注 10 : Präsentation neues Köchel-Verzeichnisses [∞](#)

注 11 : TurboScribe 無制限の音声・動画の文字起こし [∞](#)

注 12 : Konrad, Ulrich (1992). Mozarts Schaffensweise, Studien zu den Werkautographen, Skizzen und Entwürfen, Vandenhoeck & Ruprecht

注 13 : Eisen, Cliff (2002). The New Grove Mozart, Grove, London, 2002

注 14 : 筆者も 60 年程前に日本モーツアルト協会の懇親会で同様の違和感を持った。当時は会員番号が K.626 までに制限されていた。それに鑑み、副会長の属啓成氏は自らの名札に K.627 と架空の番号を書いたのであった。

注 15 : 日本モーツアルト協会特別講演会報告：『新ケッヒェル作品目録』について、神戸モーツアルト研究会 第 129 回例会 [∞](#)

注 16 : 前掲 Zaslaw (1997)

注 17 : 前掲 Konrad (1992)

注 18 : 野口秀夫 (2021.2.7). 「モーツアルトのノットゥルノ K.346 (439a) & K.439 の見出された台本作者たち」神戸モーツアルト研究会 第 276 回例会 [∞](#)

注 19 : 神戸モーツアルト研究会版 モーツアルト全作品・草稿・スケッチ年代順目録 [∞](#)

注 20 : Wikipedia: Köchel catalogue (2024.10.21 閲覧) [∞](#)

注 21 : 1991.11.18 (月)–20 (水) 国立音楽大学において海老澤敏委員長のもとで開催された。海外からはマリウス・フロトホイス、フェイ・ファギュソン、ニール・ザスロー、ルードルフ・アンガーミュラー、ジャン=ピエール・マルティ、ヘルムート・リリング、クリストフ・ヴォルフ、ヴォルフガング・プラート、アラン・タイソン、オットー・ビーバー、ブリジット・マサンが参加した。

注 22 : Leisinger, Ulrich (2022). Miscellanea Mozartiana – Start, Herausgegeben von der Internationalen Stiftung Mozarteum Nr. 1 [∞](#)

注 23 : Newsletter of the Mozart Society of America [∞](#)

注 24 : Mozart Studien, founded in 1991, publishes articles in German, Italian, French or English. The focus is on scholarly works on the work of Wolfgang Amadeus Mozart. [∞](#)

注 25 : Zaslaw, Neal / Cowdery, William (1991). The Compleat Mozart: A Guide to the Musical Works of Wolfgang Amadeus Mozart, W W Norton & Co Inc. (邦訳：ザスロー、カウドリー 編／森泰彦 監訳『モーツアルト全作品事典』音楽之友社、2006)

注 26 : 後に Takashi Nakajima 氏による英訳、ザスロー教授ご自身の監修で返送いただいた [∞](#)

注 27 : Noguchi, Hideo (1990). Mozart - musical game in C K 516f, in: Mitteilungen der Internationalen Stiftung Mozarteum, 38.1990, 1-4. - S. 89 - 101 [∞](#)

注 28 : 野口秀夫 (2022.11.6). アリア「いとしい人よ、もし私の苦しみのすべてを」ハ長調 K.deest の詩テキストと音楽テキストの関係、神戸モーツアルト研究会 第 293 回例会 [∞](#)

注 29 : 野口秀夫 (2016.4.3). カンタータ『オフェーリアの健康回復に寄せて』K.477a の再発見、神戸モーツアルト研究会 第 247 回例会 [∞](#)

注 30 : 野口秀夫 (2021.11.7) バス・アリア「歯が一本、もろくなり、冷たさが沁みる」K.209a への考察、神戸モーツアルト研究会 第 281 回例会 [∞](#)

注 31 : 前掲野口 (2021.2.7)

注 32 : 野口秀夫 (2015). 『アマデー君、遊びましょ！』神戸新聞出版、2015、p.85–88

注 33 : 前掲野口 (2015)、p.86

注 34 : 前掲野口 (2015)、p.88–94

注 35 : Leisinger, Ulrich (2022), Dekonstruktion eines Mythos Mozart und der Text des Kanons KV 559, Miscellanea Mozartiana, Herausgegeben von der Internationalen Stiftung Mozarteum Nr. 4 [∞](#)

注 36 : Welcome to the Köchel Catalog Online [∞](#)

注 37 : 例えば 1782.10.2 付けヴァルトシュテッテン男爵夫人宛て手紙の末尾は『書簡全集』(書籍) では「アウエルンハンマー嬢によろしく」と解釈していたが、『デジタル版書簡全集』では「アウエルンハンマー嬢によろしくなく」となっている。ドイツ語 pdf には異同の断りがなく、英語 pdf で辛うじて訳註の欄に異同に関する言及あり。

(作成：2024年10月25日、改訂：2024年11月3日)